

2013年度総会資料

2014年3月22日（土）14時～17時 於：エルプラザ

北海道の労働と福祉を考える会

目次

1. 報告事項

- 1-1. 2013年度活動概要（下郷沙季）
- 1-2. 夜回り（大家佳子・柏谷美沙）
- 1-3. 炊き出し（小川遼）
- 1-4. 調査活動（上田文和）
- 1-5. 同伴・フォローアップⅠ（山口大輔）
- 1-6. 同伴・フォローアップⅡ（下郷沙季）
- 1-7. 講演会（下郷沙季）
- 1-8. 学習会（下郷沙季）
- 1-9. 他団体との連携（山内太郎）
- 1-10. 広報（上田文和）
- 1-11. 助成金（楠高志）
- 1-12. 来年度に向けて（小川遼）

2. 審議事項

- 2-1. 2013年度会計報告（楠高志）
- 2-2. 2014年度役員体制（山内太郎）
- 2-3. 2014年度活動計画（山内太郎）
- 2-4. 2014年度予算案（山内太郎）

3. 私と労福会

1. 報告事項

1-1 2013年度活動概要

4月9日	札幌市との意見交換会（炊き出しについて）
4月12日	新入生説明会
4月20日	事例検討会
5月18日	講演会「元ホームレスの話を聞く会」（廣岡繁さん）
5月26日	炊き出し（天使大学たべてる協力）
7月13日～15日	ホームレス支援北海道ネットワークの函館調査への参加
7月17日	臨時会報「ともに生きる NO.27」発行
7月21日	ここわらねつとにて活動紹介
8月19日～21日	ホームレス支援北海道ネットワークの北見・釧路調査への参加
8月25日	夏季野宿者概数調査 会報「ともに生きる NO.28」発行
9月14日～15日	全国寄せ場交流会への参加
10月18日	札幌国際大学にて労福会の紹介
12月7日	炊き出し・法律相談会（司法書士会と共催）
12月23日	ろうふくお料理会
1月1日前後	第44回釜ヶ崎越冬闘争への参加
1月10日	札幌市との打ち合わせ（概数調査について）
1月18日	冬季野宿者概数調査 会報「ともに生きる NO.29」発行
2月16日	ここわらねつとにて活動報告
2月22日	炊き出し・法律相談会（司法書士会と共催）
3月4日	講演会「札幌におけるホームレス支援の現状と課題」 （講師：山内太郎、主催：西区SOS実行委員会）
3月17日	ろうふく美術鑑賞会
3月22日	総会
通年	運営会議（毎週土曜日）、夜回り（第1・2・3・5土曜日）

1-2 夜回り

当会では現在、毎週土曜日（第4土曜除く）の19:00に札幌エルプラザ2階（北8条西3丁目）に集合して、2時間余の夜回り活動を行っています。夜回りでは、定期的に野宿者が多く居ると思われる場所に出向き、コミュニケーションをとります。当会では缶コーヒー・カップ麺や携帯カイロ、チラシ・パンフレットを持って巡回しています。当会自前のチラシには、当会の相談用連絡携帯電話番号、次号の炊き出しのお知らせ、他団体の炊き出し情報等、裏面にはスタッフの小話を掲載しています。

夜回りの目的・意義

夜回りの目的・意義は、①安否確認、②野宿者との間に信頼関係を構築、③新たな野宿者の早期発見です。

① 安否確認

今冬は巡回中に救急車を呼ぶ事態は起こりませんでした。しかし、野宿者には高血圧、糖尿病など疾患を患っていると思われる方が多く、冬を越せるのか心配な方がたくさんおられました。会員は野宿者に体調の具合を聞くだけでなく、急激な体重の増減がないか、顔色が悪くなっていないか等の見た目の変化も気にして安否確認を行い、病院へ繋げるサポートをしました。

② 野宿者との間に信頼関係を構築

野宿者が困った際に当会を頼って頂き、野宿者の意思や経済状況に沿った適切なサポートが行えるようにするため、話し合いを重ねて信頼関係を構築しました。

③ 新たな野宿者の早期発見

野宿の経験が長期に渡ると「路上でもなんとか生きていける」等の思いから社会復帰への意欲が奪われていってしまいます。路上生活になって間もない方は社会復帰への意欲が強く、支援団体との関係を持っていない場合が多いです。そのような方を早期発見し、迅速に支援を行うことで社会復帰へと繋げることができます。札幌中央区では巡回中に新しい野宿者と出会うことは少なくなく、なんもさサポート、ベトサダ等他団体の協力を得て、数名の方を居宅生活に繋げることができました。

夜回りの概要

表 1

日時	毎週土曜日（第 4 土曜除く）19：00～21：00
集合場所	札幌エルプラザ 2 階
解散場所	同上
巡回コース	札幌駅、大通、狸小路・ススキノ、桑園、創成川、中島公園
配布物	チラシ、コーヒー、カップ麺、風邪薬、絆創膏、湿布、テレフォンカード
貸出物	体温計、爪切り、消毒液

表 2 夜回りで出会えた野宿者の数（月初めの巡回のみ）

日付	札幌駅	地下通路	大通	狸小路	創成川	合計	参加者
25/04/13	5	12	0	6	0	23	14
05/04	8	7	0	7	0	22	13
06/01	10	12	0	4	0	26	12
07/06	7	5	7	8	2	29	15
08/10	8	0	11	5	3	27	10
09/07	7	0	8	6	0	21	10
10/05	8	7	7	4	0	21	10
11/02	9	12	0	3	1	25	7
12/14	9	10	0	4	0	23	14
26/01/04	10	11	0	1	0	22	9
02/01	10	9	0	6	0	25	10
03/01	9	17	0	3	0	29	10
合計	126	113	33	64	6	337	160
平均	10,5	9,4	2,7	5,3	0,5	28,1	13,3

例年との変更点

①チラシ裏面にスタッフの小話を掲載

夜回りに参加するスタッフがチラシの裏面に小話を掲載することになりました。小話の内容は、最近あった出来事や炊き出しの感想、当会からの連絡等です。意外と野宿者に好評で、「これを楽しみにしている」という声を聞きます。

②巡回コースの拡大

冬季期間前に創成川、中島公園付近を巡回しました。創成川付近では数名の野宿者

と思われる方と出会うことができました。しかし、配布物を断られることが多く、これからの信頼関係の構築が大切だと思われます。

来期に向けて

夜回り活動の目的として、当事者の安否確認はもちろんですが、何よりも当事者との「つながり」を保つことが大切ではないかと感じています。社会との「つながり」が薄くなりがちで当事者が孤立してしまうことを防ぐために、夜回り活動を通じた当事者の人数把握や当事者との定期的な関わりが今後も欠かせません。

来期に向けた課題として、初参加者が興味を持って2回目以降の活動に参加できるような工夫が必要だと感じています。また、当事者の中には労福会の配布物資を拒否するなど、接触することが難しい人もおり、そのような当事者へのアプローチや支援方法についても考えていきたいと思ひます。

支援のあり方は一つではなく、その当事者によって求めている支援は異なります。当事者を取り巻く環境や制度が変化する中で、メンバー同士の話し合いを重ねながら従来のやり方に捉われない支援のあり方を考えていきたいと思ひます。

1-3 炊き出し

今年度行われた炊き出しは全部で三回であった。この回数の少なさは財政難による。5月26日はその最初で、労福会独自の企画だ。エルプラザで行われたこの炊き出しで特徴的だったのは、調理を天使大学の料理サークルである「たべてる」にお願いしたことと、北大の落語研究会による高座であろう。どちらも下郷事務局長の発案である。食事は量が少ないという意見が当事者から多く寄せられはしたものの、概ね好評であった。献立は鱈のあんかけ、肉じゃが、ごま和えなどの家庭的なものばかりだ。弁当よりも温もりを感じられる、良いものであったと思う。来場者数は48名だった。

残りの二回は司法書士会との共催で、会場はどちらも札幌市民ホールを利用した。12月7日は司法書士会と交渉し、自分たちで調理した甘酒をくばった。クワイヤーのママさんたちによるミニコンサートも試みたが、会場側が認めず見送りとなってしまった。来場者は50名だった。

最後は2月22日に行われた。当事者の参加は58名で、今年度最も多かった。とりたてて書くほどの新しい取り組みはなかったが、事前準備をより入念にし、また4、5名ほどのグループにわけ、その単位で行動することを徹底することで、炊き出し全体をよりスムーズに進行できたのではないかと考えている。近頃の炊き出しでは10分前後開場が遅れることが通例となりつつあったが、この日は開場までの時間に相当な余裕ができていた。ところで、以前からもそのような声はあがっていたものの、今年度はたったの三回となってしまった炊き出しの意味・意義はなおさら疑わしくなっているのかもしれない。年に三回では彼らの生命の維持という点においてそれほど貢献しているとは思えないのである。このことについてここで簡単に確認し、今年度の炊き出しの総括としたい。

当事者にとって、労福会の炊き出しの意味とはなんだろうか。もちろん食事ができるし、風呂券やカミソリ、カップ麺ももらえるのだからありがたい話ではあるのだ。これだけでも意味がないとは言えないだろうと思う。とはいえ、このことだけでは労福会が炊き出しを継続する理由としては不十分であるという意見が多そうだ。けれど、それだけではない。今年度は三回とも散髪を行ったが、散髪に関して労福に期待を寄せる当事者は多い。ちなみに12月、2月の炊き出しではいつも来てくださっている及川さんに加え、会員の渡部さんの紹介で竹村さんも協力して下さり、希望者は全員散髪できた。さらに他の団体の炊き出しと比較すると、労福会の炊き出しの特殊性が見えてくる。支援者—被支援者の壁が薄いのである。それに伴って少しの和やかさと、ふれあいがある。手際の悪い支援者の学生に被支援者が野次を飛ばす。「最近の労福はほんとにダメだな！」こんなセリフは他ではまず聞けないだろう。被支援者たちはもっと申し訳なさそうにかしこまっていること

が多いのだ。炊き出しは野宿者の危ぶまれる生命を守ることに意味があるのだという人がいる。しかし当事者にとって労福会の炊き出しはそのような基準では括りきれない何らかの意味があるのだと考えることもできるのではないだろうか。

1-4 調査活動

本年度は平成 25 年 8 月 25 日と平成 26 年 1 月 18 日に、野宿者人数調査を行いました。結果は以下の図の通りです。

平成 25 年度 札幌市野宿者人数調査

	夏季	冬季
男性	30 (-38)	35
女性	2 (-4)	1
不明	14 (+4)	14
計	46 (-38)	50 (+14)

〇内は前年度と比べての増減

まず、夏季の調査に関してですが、前年度に比べて 38 人の減少となりました。数字の上では半数近い減少となりましたが、実際に野宿者の数が激減しているかといえ、そうではないように思えます。人数調査の反省でも出されたのが、数え漏らしの可能性です。札幌市の野宿者の特徴として、移動型であるということがあげられます。調査のコースではないところで寝ていたり、または移動していたりしている場合はカウントから漏れてしまいます。今回の調査でも、実際に野宿者の方々に結果を報告すると、「そんなに少ないはずがない」、「起きていたけれど労福会には会わなかった」などのコメントをいただきました。調査員の人数や調査コース、移動型の野宿者などの様々な要因があるため、ある程度の数え漏らしは仕方ありません。問題はどの程度数え漏らしが存在するかです。半数近い減少というのが実感できないため、相当数の数え漏らしが存在していると考えられます。数え漏らしという問題にどう対応すべきかについては後述します。夏季人数調査の総括としては、数字上は大きく減少しているものの、実際の人数を反映しているかどうかについては疑問が残るため、引き続き中止していくことになりました。

冬季の調査では、夏の人数調査より若干多い 50 名となりました。夏の調査では、地下鉄等の駅が開いておらず、中に入って調査できなかったという反省があったため、今回は開始時間を少し遅くして、駅などはできるだけ最後に回ってほしい旨を伝えました。そのため、夏に比べて郊外の駅などでの目撃が多くなりました。

冬の調査でも数え漏らしが話題になり、反省会での意見として出されたのが、「例年調査コースが固定されており、現状に合わなくなって来ているのではないか」というものです。例年、マクドナルドなどの 24 時間営業の店もできる限り調査することになっていますが、今回訪れた時には、24 時間営業をやめていたり、長時間の利用を禁止したりしている店舗がありました。また、人数調査のコースはほとんど固定されているため、コース以外の場所で休むことが多い人を全くカウントできていない可能性があります。ですが、だからと言ってコースを完全に変えてしまうと、今までの調査との比較が難しく、資料的価値が損なわれてしまう可能性があります。コースについては、引き続き議論していきたいと思えます。

1-5 同伴・フォローアップ I

1. 脱路上支援活動について

当会にとっての炊き出しや夜回りなどの活動の位置付けを端的に言えば、野宿をしている当事者の方たちが、今の状況から抜け出して部屋で生活をしたいと思ってもらうための働きかけであるということになります。すると、部屋で生活したいと思った人たちに対して具体的な居宅生活に向けた支援を行うことが第二のステップであり、例えば生活保護申請の同伴や部屋探しのための不動産の同伴などがそれに該当するわけです。あるいは住居を提供している支援団体へ紹介するというのもその一つです。これらをまとめて脱路上支援活動と呼ぶことにします。

今年度は下記表にもあるように全部で17件の脱路上支援活動を行いました（ただしこれは報告書やメーリングリストで確認できた数字のみ）。

生活保護同伴／居宅入居支援活動（2月末日現在）

	本人の状況と年齢	野宿歴	月	同伴／相談のきっかけ	申請（相談結果）	同伴者
A	居宅（46女）	—	2月	ベトサダからの連絡	居宅保護	成田
B	路上（47男）	1日	3月	本人からの電話	ベトサダ入居	高田/下郷
C	路上（40男）	？	3月	夜回り	ベトサダ入居→空港	兼丸/楠/細谷
D	居宅（60代女）	—	4月	知人からの依頼	支給決定	下郷/田口
E	居宅（45男）	—	5月	ベトサダからの連絡	居宅保護	成田
F	路上（49男）	14日	6月	夜回り	居宅保護	井上/山口/三浦
G	路上（52男）	3ヶ月	7月	夜回り	救護施設入所	市川/楠
H	路上（54男）	3ヶ月	7月	夜回り	居宅保護	上田/井上
I	知人宅（39男）	—	7月	知人からの依頼	居宅保護	楠/波田地/兼丸
J	路上（64男）	3ヶ月	8月	夜回り	居宅保護	市川/井上
K	路上（72男）	2ヶ月	10月	知人からの依頼	生活保護費支給回復	下郷/井上
L	居宅（22男）	—	10月	ベトサダからの連絡	居宅保護	成田
M	路上（39男）	不明	11月	夜回り？	居宅保護	楠/下郷
N	路上（46男）	2ヶ月	11月	夜回り	居宅保護	井上
O	居宅（35女）	—	11月	知人からの依頼	支給決定	小川/楠/山内
P	路上（37男）	7日	1月	夜回り	救護施設入所	井上
Q	路上（67男）	4ヶ月	2月	夜回り	救護施設入所	舒/井上

野宿をしている方からの相談は 17 件中 11 件。そのうち 8 件が生活保護申請の同伴、2 件が居住スペースを保有する他の支援団体への紹介、もう 1 件は、役所に出向き、確認を取るといった生活保護費支給回復に向けた支援となりました。また、支援が始まるきっかけは、夜回りによって脱路上を希望する人と出会った場合（つまりこちらから働きかけて支援につながった場合）が 9 件、本人や知人から電話などの連絡を受けた場合（つまりあちらからの働きかけで支援につながった場合）が 2 件となっています。

一方、部屋のある方からの相談は 6 件でした。そのうち 3 件は他の支援団体から別の支援団体への橋渡しをしたケースであり、残り 3 件は本人ではなく友人・知人からの連絡によりつながったケースです。いずれも生活保護申請の同伴をしています。

今回、労福会の脱路上支援につながった人たちの特徴として、30 代から 40 代の比較的若い年齢層に集中していることが分かります。また、こうした年齢層の傾向に関連して、野宿歴の短い人には、脱路上支援が機能していますが、1 年以上のいわゆる長期野宿層の人たちには、今年度は一人も対応することができなかったということが分かります。このことから、今後、長期野宿層の人たちに対して、どのようにアプローチをしていくべきか、労福会の支援課題が示されています。

2. フォローアップ活動について

当会のなかでも何度も確認されていることですが、脱路上そのものは当事者の方たちにとってゴールではありません。それはその人の生活の立て直しが始まったことを意味しているのであり、その後の生活をどのようにして過ごしていくかがより重要です。

しかしその人に寄り添いながら継続してかかわりを続けることは、現在の当会の力量を考えてみても厳しいものがあります。ただ、活動を通して知り合った以上、その人の生活が安定したものになっているかは、非常に気になる場所であり、「できる範囲で」という条件が付きますが、ささやかなかかわりを続けているところです。

路上から居宅に移ってからのケアが必要な人というのは多いですし、居宅に移ってから、その人が孤立に陥らないためにも、居宅訪問をはじめとしたフォローアップ活動は欠かせないサポートです。居宅に移った人が再路上に陥らせないためにも、フォローアップ活動により居宅生活者のニーズを汲み取る必要があります。そのような点もまた、当会の支援課題として考えなくてはなりません。

フォローアップ活動（2月末日現在）

	年齢・性別	月 日	活動の主な内容		訪問者
R	57 男	3月30日	安否確認	本人宅	井上／細谷
		7月6日	安否確認	本人宅	井上
		12月14日	安否確認	本人宅	井上
H	54 男	8月31日	安否確認	本人宅	井上
F	50 男	8月29日	安否確認	本人宅	井上
J	64 男	10月5日	安否確認	本人宅	上田/井上
K	72 男	12月14日	安否確認	本人宅	井上
P	37 男	1月26日	救護施設訪問	明啓院	山内/下郷

3. 脱路上支援活動・フォローアップ活動の課題

労福会の慢性的な人手不足は今に始まったことでなく、したがって緊急的な対応となる場合が多い脱路上支援活動や継続的なかかわりが必要となるフォローアップ活動は常に不十分なままここ数年が過ぎています。おそらくこの問題は簡単に解決することではないので、来年度以降も限られた人数で、「できる範囲」で行っていくしかありません。

ところで今年度はこれらの活動にかかわって問題となった事案がありました。それは労福会の会員ではない一般市民の方との協同のあり方です。「部屋のある方からの相談は6件」と報告しましたが、その中で友人・知人からの連絡によってつながったケースに、当事者と上下関係が生じているのではないかと疑われるものがありました。今回は連絡をした方と直接話し合っただけで事実確認をし、今後誤解が生じないようなかかわりをお願いするという対応をしましたが、ともすれば弱い立場になりやすい当事者の方たちに対して労福会が不適切なかかわりをしているという風にとられかねない問題だと思います。

もちろん一般市民の方の理解を得て協力していくことは労福会の活動の趣旨に沿うものではありませんが、他方で生保同伴のように個人情報など非常にデリケートな部分を扱わざるを得ない活動について、労福会がどこまで一般の市民の方と活動を行っていくのか（あるいはそもそも一緒に行うべき活動ではないのではないか）、十分に議論されたことがなかったことでした。

労福会はホームレスの方々に対する支援活動をしている団体ですが、あらためて「できる範囲」について議論をする必要があるのかもしれない。

1-6 同伴・フォローアップⅡ

労福のフォローアップ活動は一言で言うならば“荒さ”が目立ち、これまでもその指摘は会員間で何度となくなされたが、なかなか改善されてこなかった。今年度は、そこをいきなりきめ細やかにできたかという点と全くそういうわけではないのだが、少なくともこれはまずいという認識が共有されつつあるという点では労福のフォローアップ活動の転換期となったと言えるだろう。

その荒さがどういったものかについて、まずは同伴記録の不備が多いという点を挙げなければならぬ。今年度は居宅生活者に暑中見舞いを書いて安否を確認すると同時に、その住所がいまだ使われているのかを調べた。その過程で、2010年度よりも以前の記録がほとんど残されていない事実を初めて知った会員も多い。また、今年度分の記録も抜けているところが多く、今後工夫が必要とされる。

次に、ほとんどの会員が自分の担当した対象者以外のことを把握していないという荒さがあり、そのため持続的な支援が必要であると判断されたケースでも担当者の力量や時間的余裕に大きく左右され、担当者に精神的な負担を課すことも多かった。これには、同伴記録の不備も関係するほか、次々に流れていってしまうメーリングリストで情報を追う難しさもあるだろう。そこで、今年度は今まで探し出すのに苦労していた対象者の個人情報を一括で管理するデータベースの作成に取り掛かった。来年度中には実際の運用が可能になる予定である。

そして、フォローアップは基本的に会員が居宅生活者宅を訪問することによって行われ、人員不足や情報共有の難しさ等の問題がありながらも、ほかの形を模索する試みがなされてこなかった。そこで今年度は、12月23日に「ろうふくお料理会」、3月17日に「ろうふく美術鑑賞会」と題して、居宅生活者と会員の交流、あるいは居宅生活者同士の交流を図りながら、孤立等の現状（あるいはそういった問題が全くないという現状）やニーズを把握し、労福会の体質・体力を考慮した上で、それらがどのように解消可能であるか、またどこまで取り組むことができるのかを探るきっかけとした。しかし、まだこれらのイベントの総括は終わっておらず、そもそもこちらが連絡先まで把握している居宅生活者の数自体が少なく、各イベントの参加者は前者が3名（うち2名は早退）、後者が1名と非常に少なかった。次回は来年度の5月に「ろうふくお花見会」が予定されているが、それまでに一度方針を再検討する必要があるだろう。

1-7 講演会

年度初めの時点では、財政的な厳しさから今年度は講演会の実施を控えるという話も出ていたが、一方、一般の人々にホームレス問題等について考える機会を提供するというのも労福の一つの役割であり、何らかの形で今年度もそうしたイベントを実施したいとの声もあった。また、今までは遠方から著名な学者や支援者を招いていたが、普段なんのこともなしに労福会員が見慣れ、聞き慣れしているホームレス当事者の生の声が、そうした活動に縁の無い人にとっては大変貴重なものであり、そうした経験を通して偏見を無くしていくことも可能なのではないかといった意見も出たことから、ホームレス経験者自身の声を聞く場の提供という今までにない形での企画を打ち出す運びとなった。講師には、数年にわたって労福会と関わりを持ち、昨年脱路上されたばかりの廣岡繁さんに白羽の矢が立った。そしてご本人が快く受けてくださったことで、5月18日に「元ホームレスの話聞く会」が実現した。当日は約50名が参加し、大変盛況であった（講演会の内容については会報28号を参照のこと）。また、元々この講演会は、様々な野宿経験者によるオムニバス式講演会の第1回目と位置付けられていたが、現時点で次回の講演者は未定である。これには、労福が講演を依頼できるほどの関係を築いている元当事者が少ないだけでなく、ホームレスという過去を自ら語るができる人がそもそも少数であり、また語る意思があってもある程度話すこと自体が得意でないとなかなかイベントとして成り立たないといった背景がある。

1-8 学習会

春の時点では、新規会員が労福の組織形態や活動内容等を把握するための教科書作りを目指し、またその過程を現会員の情報共有の機会とすることを主な目的として学習会が始まったが、途中から、教科書作りは学習会という形式に拘らず、wikiを利用してネット上で編集・公開を試みることに方針を変更した。そのため学習会は一時中断されたが、10月以降、原則毎週木曜日に「自主ゼミ」という名前で学習の機会を再び設けることとなった。当初、自主ゼミは、「会員のホームレスに関する知識を底上げすることで、問題を多面的に捉え、模索する機会を生み、また、現場においても場当たりの支援に留まらない、より厚みのある活動を展開させるねらい」を持ったものとして開始されたが、学びたいテーマや報告者などがなかなか集まらず、現在は頓挫している状態である。自主ゼミを実施した日と内容は以下の通り。

- ・ 10月17日：生活保護法「改正」と、生活困窮者自立支援法について
- ・ 10月24日：生保申請の際に知っておいた方がいい制度や法律について
- ・ 10月30日：貧困とジェンダーについて
- ・ 11月11日：奨学金問題について
(講師：北海道学費と奨学金を考える会インクル 藤島和也さん)
- ・ 11月21日：ベーシック・インカムについて (労働組合の学習会に参加)
- ・ 12月5日：NHK ハートネットTV の生活保護法改正に関する特集の観賞
- ・ 12月20日：みなづき会の炊き出しを見学
- ・ 12月22日：マナチャペルの炊き出しを見学
- ・ 年末年始：自主ゼミの一環として、会員4名が釜ヶ崎越冬闘争へ参加
- ・ 1月8日：釜ヶ崎越冬闘争の報告
- ・ 3月6日：DVD「ホームレスと出会う子どもたち」観賞

1-9 他団体との連携

民間支援団体との交流

労福会の活動はほぼすべて労福会のみで行っているわけではなく、様々な支援団体などと協力・連携することで成り立っています。今年度もこれまで同様に多くの支援団体の皆さんに支えていただきました。それぞれの活動の中身は別のところで報告されていると思いますが、ここではあらためて関係した（協力いただいた）団体について振り返りたいと思います。

第1, 2, 3, 5土曜日に行っている夜回り活動では当事者の方に配布する飲み物（夏場のジュース類）を**ハンズハーベスト**さんから頂きました。ハンズハーベストさんには後述する共同炊事会で使用する食材のいくつかについても利用させていただきました。また、夜回りで出会った脱路上を望む人への緊急宿泊を**ベトサダ**さんや**みんなの広場**さんをお願いすることは何度もありました。いつも突然お願いの連絡をする（夜回りのときなのでやむを得ないのですが）のですが、快く引き受けてくださることは本当に心強いです。**明啓院**や**あけぼの荘**、**白石福祉園**といった救護施設も労福会が直接入所をお願いするわけではありませんが、フォローアップとして訪問して入所後の様子について話を聞かせてもらいました。

5月に行った共同炊事会では天使大学の料理サークル**たペテ**るさんに栄養満点の炊き出しメニューを考えていただき、実際に当事者の方との交流もしていただきました。**北大落語研究会**さんには食事の後に落語をしていただき和やかな雰囲気をつくっていただきました。

7月には**ホームレス支援北海道ネットワーク**からの依頼で函館のホームレス調査の協力を行いました。また同様に8月には釧路と北見での調査にも同行しました。この他8月に行った人数調査は早朝3時半に集合して行うため、集合場所の確保がとても大変だったのですが、今年度は**なんもさサポート**さんの会議室を借りて行うことができました。

12月と2月には**司法書士会**さんと共催で炊き出し相談会を実施しました。司法書士会さんには会場費や衣料・食費など負担していただいております、財政的にも厳しい労福会としては非常に助かっています。今後はより一層交流を深めて相談会がより良いものになっていくよう努めていきたいと思っています。また、**北一条教会**さんには炊き出しを行う際の会場を提供してくれないかという相談をしていました。結果的にはこちらの事情で実現しなかったのですが、非常に前向きな回答をいただけていました。来年度以降も可能性を探っていきたいと思っています。

札幌市内で毎週2回炊き出し活動を行っている**みなずき会**さんと**ハンドインハンド**さん

には12月に炊き出しの様子を見学させていただきました。

ビッグイシューさっぽろさんとは事務所のブースが隣ということもあり、夜回りに参加してもらったり、販売員募集のビラを夜回りで配布したりといった交流がありました。せっかくお隣同士なので、今後具体的な活動での連携を何か考えてもよいかもしれません。

反貧困ネットワーク北海道さんが開催している街頭相談会では労福会のビラ（会員募集）を置いていただきました。

以上、非常に簡単ですが今年度を振り返って関係した団体について挙げてみました。来年度も様々な方たちの力を借りて活動を続けることになるのではないかと思います。そのため今後は一層良好な関係を築いていくためにも自分たちの活動に協力を求めるだけでなく、こちらから協力できることは積極的に行っていく姿勢を見せることが必要でしょう。

行政機関との連携

労福会は設立当初から札幌市に対してホームレス問題に対する対策を要望してきました。最初はケンモホロロだったのですが、2002年に成立したホームレス自立支援法を境に状況が変化しはじめました。2003年に初めて実施された全国調査（概数調査）では労福会が調査の委託を受け、また同年には札幌市との共催で炊き出し総合相談会が実現しました。以来10年間、労福会にとって札幌市は炊き出しや調査を行う上で重要なパートナーとして位置づいてきたと言えます。

しかしここ数年、炊き出し総合相談会の実施をめぐる札幌市との共催のあり方を再検討するべきだという声が出てくるようになりました。特に昨年度、ハンドインハンドさんの企画からの撤退と総合相談会への参加率の低さ（初めて年間で一桁台となった）もあって、今年度はこれまで通りのやり方なら労福会としても共催はできないと札幌市に対して伝えることとなりました（このあたりの詳細は会報「ともに生きる第28号」参照）。

札幌市との話し合いは4月9日と7月23日の2回にわたって行われましたが、互いにより良いアイデアを出すことができず、結局もの別れに終わりました。したがって10年間続いた共催の炊き出し総合相談会は、今年度は実施されなかったのです（総合相談会自体は炊き出しなしで実施されました）。

もちろんこのことが札幌市との関係を悪化させたというわけではありません。むしろ良い緊張関係を保ちつつ、ホームレス問題の解決に向けた取り組みを互いに提案できるような関係へと発展させていく契機ととらえるべきです。例えば10月と11月の2回ですが、札幌市から労福会との合同の夜回りを見据えて、そちらの夜回りの様子を見学してほしいとの申し出がありました。札幌市の方でも月1回程度夜回りを実施しているらしいのですが、なかなか当事者とコンタクトをとれなくて難儀しているとのことでした。こういったやり取りが将来的には札幌市との共催の夜回りにつながるかもしれません。それは毎週土曜日に実施している労福会の夜回りでは生活保護申請を希望する人に出会っても週明けまで待ってもらわなければならないという問題を解決する可能性もあります（あくまで憶

測ですが)。

いずれにせよ、行政機関に対しては言うべきことは言い、協力できるところは互いに協力するような関係をもう一度つくっていく必要があると言えます。

1-10 広報

今年度の広報活動について報告します。

①会報

会報については、例年、出す時期や回数がバラバラでした。そこで、運営会議の結果、今後は人数調査の結果が出る9月と2月の年2回発行することになりました。部数としては、会員用に50部、配布用に100部の計150部印刷しました。

また、会議で労福会の財政問題が浮上したため、会費の確実な納入と寄付の増加を狙って、平成25年の7月に臨時の会報を発行しました。

②ウェブサイト

今年度は、労福会のウェブサイトに変大きな変更がありました。サーバーを移管し、デザインや内容にも変更を加えました。現在まだ製作中ですが、会員の方が気軽に書き込めるような設定にしたいとも思っています。

③SNS

SNSとしては、Facebookを活用しました。Facebookは会員制のソーシャル・ネットワーキング・サービスの一つです。Facebookを使用する利点としては、①記事の書き込みが容易、②利用している人が多く、効果的に広報を行えるなどがあります。今年度は、イベントなどがあるたびに積極的に書き込むようにしました。結果、Facebookで労福会を知って参加したという人も現れ、一定の効果があったといえます。来年度はFacebookの利用を継続しつつ、TwitterなどほかのSNSでも積極的に広報活動を行っていきたいと思います。

④マスメディア

毎年、年末になるとテレビ局や新聞が取材に来るようですが、今年度も年末に多くの取材を受けました。テレビ局はHBCとSTV、新聞は読売新聞が取材に来ました。

⑤講演

今年度、労福会が主催した講演は一つです。講演では、脱路上した元ホームレスの方には講師となってもらい、その方の半生やホームレスになった経緯などを聞きました。ビラやFacebookなどでの広報が成功したのか、多くの人に参加していただきました。

他大学や他団体に招かれて講演をすることもありました。大学では札幌国際大学、団体では、「ここわらねっと」などで講演・広報を行いました。

1－1 1 助成金

平成23年度と24年度は、独立行政法人福祉医療機構（通称WAM）の助成金を申請し、年間約100万円の助成金を得て労福会の事業を行って来ました。しかし、WAMの助成金は規則が煩雑で、しかも本会会計と別のWAM専用の口座を開設して別会計で管理しなければならないため、本年度は、WAMの利用を行いませんでした。

今年度中に、申請した助成金は、次のとおりです。

1 ソロプチミスト日本財団

平成25年3月、上記財団の札幌支部より推薦を受けて高田事務局長（当時）が、ソロプチミスト日本財団の「学生ボランティア賞」に応募しました。残念ながら、全国大会の「学生ボランティア賞」には該当しませんでした。本年3月19日同財団札幌支部から、下郷事務局長が、5万円を受け取りました。

国際ソロプチミストは、管理職・専門職に就いている女性の世界的組織で、人権と女性の地位を高める奉仕活動をしています（HPより）。このような組織に、我が労福会が認知されたことは、喜ばしい事だと思います。

2 公益財団法人 コープさっぽろ社会福祉基金

本会会員の井上さんから情報提供を受け、会計担当の楠が6月中に申請しました。7月下旬、審査の結果10万円の助成決定をした旨の知らせが届きました。社会福祉関係の団体が多く集った交流会では、札幌の野宿者の現状を訴えました。

3 NPO法人北海道NPOファンド（旧北海道越智基金）

札幌市民活動サポートセンターのメールマガジンから情報を得て、8月2日に文書を送付して応募しました。8月30日メールで、助成決定の知らせがあり、後日5万円の助成金の助成の文書が送付され、9月12日に入金済みです。

4 生活クラブ福祉基金

こちらも、会員の井上さんから紹介があり、応募用紙を取り寄せていましたが、締め切り期日を楠が平成26年1月末と勘違いしてしまい、気が付いて送った26日には、1日遅れで期限切れの旨、電話で連絡が有りました。担当者とお話ししたところ、来年に応募すれば有望な感触を得ました。

5 社団法人札幌青年会議所 ブルーアース基金

情報は、1 昨年よりHPで得ていて昨年度も応募しようと連絡したところ、東日本大震災の影響で実施していない、と回答がありました。今年度は、実施していることを確かめて5月10日にFAXで申請書等を送付しましたが、8月3日選考の結果落選との文書が届きました。

6 ジャストギビング

ジャストギビングは、インターネット上で寄付を募ることのできるサイトです。財政難を受け、労福会も利用を検討しています。応募の条件として、会計に関するいくつかの規約の条項が必要であったため、これを受け9月臨時総会で規約を変更しました。来年度に本格的に利用を開始します。

1-12 来年度に向けて

来年度、労福会は受難の年となるだろう。というのも、今年度なんども議論された資金問題は未だ解決していない。経費削減のため行われた仕分け会議によって延命処置は講じられたものの、新たな収入源がなければ、来年度で使い果たす計算である。一応の策としてはクラウドファンディング（インターネットサイトを介して寄付を募る）が検討され、運営会議で可決された。こちらは現在のところ作業中であるが、どの程度の成果が上がるのかは未知数である。会員の範囲及び会費の納入を厳格化したため若干の増収はあるかもしれない。しかし、そもそも会費が収入全体に占める割合というのは些細なものに過ぎないのだった。

存続のためには、より大幅な縮小が必要だろう。既に今年度は炊き出しの回数を司法書士会との共催も含め、年3回に減らしている。夏の人数調査を行わないという案こそ通らなかったが、タクシーの使用を控えるなどの取り組みによってコストを抑えた。だがそれでも収支のバランスは取れていない。

問題は資金だけではない。人員不足というものもある。人数が少なれば活動の幅は制限されることになるし、一人当たりの負担も大きい。今年度は比較的新入生への呼びかけに力を入れた年であったが、ホームレスの問題は最近ではもう学生の関心を惹きつけにくいテーマとなったのだろうか。

とはいえ、縮小してばかりでは労福会の存在意義が問われてしまう。原点に立ち返り、活路を見出したい。「北海道の労働と福祉を考える会」という名前から野宿者支援という活動内容はすぐに連想されるものではない。これは椎名先生が少しの野心を燃やしてつけたものだ。けれど労福会の活動は、夜回り、人数調査、炊き出し、同伴にほとんど限られたものであった。もっと新しい方向に手を伸ばすというのも、一つの選択だろうと思う。

2. 審議事項

2-1 2013 年度会計報告(当日)

2-2 2014 年度役員体制(当日)

2-3 2014 年度活動計画

現時点での活動計画は以下のようになっています。

4月	札幌市との話し合い 新入生歓迎強化月間	10月	
5月	18日フォローアップ兼親睦を深める会(花見) 24日共同炊事会	11月	
6月		12月	炊き出し相談会(司法書士との共催)
7月	人数調査方法の検討	1月	人数調査(札幌市からの委託)
8月	人数調査	2月	炊き出し相談会(司法書士との共催) 会報発行
9月	会報発行	3月	総会

・運営会議

第4土曜日及び夜回りの前の一時間に行う。夜回りの前のものについては、ここで同伴・フォローアップ事例の報告も行う。

・夜回り

原則として第1, 2, 3, 5土曜日に実施する。

・調査

今年度は6月、10月、11月など企画が特に予定されていない期間、およびその他の期間に運営会議等において調査活動の検討を行う。

・会報

9月末、2月末に発行する。その他、必要に応じて臨時増刊号を発行する。

2-4 2014年度予算案（当日）

3. 私と労福会

「この寒い北海道にホームレスがいるわけがない」。労福会の活動に参加する前はそう思っていました。しかし夜回りに参加するようになってから札幌駅や大通りなど普段歩いている場所でホームレスが生活していることを知って素直に驚くとともに、ホームレスの存在はいままで見えていなかったのではなく、ただ意識して見ていなかっただけなのだと痛感させられました。活動を通して、ホームレスが路上生活に至る原因となる社会問題について考えさせられたり、他のメンバーの行動力や問題意識の高さに刺激を受けたりなど学ぶことが多くあります。最近あまり夜回りに参加できておらず、非常に頼りない会員ではありますが、今後も夜回り活動等を通してホームレスや貧困問題に対する学びを深めていきたいと思っています。

大家佳子

自分を労福会に惹き付けるものは単刀直入に言えば彼等、当事者の不完全さです。そして同時に、彼等の不完全さに自分自身の弱さを見ているような気がして考えさせられるからだと思います。

こんな感情は実は自分で思うほど特別なことではないのかもしれませんが、それにどの当事者の対応もたいていの場合何処と無く似ています。

或る人は夜回りで自分が話し掛ける時、まるで悪いことをした小学生のように俯いて、誰もいない床を見たま「はい」と答えます。

或る人は缶コーヒーを受け取る時、僕らに気を使うのか言い馴れてないように「ありがとう」といいます。

或る人は自分が近寄っただけで、何かに怯えるように急に小さくなって、決して目を合わせてはくれません。

或る人は「それじゃ」と言うと、びっこを引いてるかのような億劫そうな足取りで下を向いたまま歩き去って行きます。

もしかしたら多くの人が彼等の目に、口に、頬の皺に、見つめる先に、戦慄しているのかもしれませんが。彼等の纏う無気力感、不甲斐なさ、情けなさ、劣等感、そして何処へも行けない閉塞感の中に、自分の顔が浮かぶことがあるのかもしれませんが。少なくとも僕はそう感じています。夜回りをする度、敷島ビルのベンチにうなだれる自分を見つけてしまうのではないかと不安になることもあります。

要するに僕にとって当事者の人々は自分の弱さそのものなのだと思います。そんな彼等を見ていると果たして弱さはついぞ癒されないのか、或いは突然ふっと忘れてしまえるものなのかよく考えます。しかしやはり僕にはまだわかりません。

ですが、というよりもだからこそ。彼等の幸せそうな顔が見られることを信じて、僕は夜回りに参加しているのだと思います。

小山田伸明

ある朝、携帯の着信音におこされた。労福会の下郷さんからの電話だった。回らない頭で通話ボタンを押すと、今日労福会の総会があるんだけど小川くんこない？ という誘いだった。僕は会員ではなかった。しかも、それまでにちょびっと活動に参加したところの感想は、何が楽しくてこんな爽りのなさそうなことやってるのかわからんというのと、山内さんスゲー飲むなあということくらいだったし、忙しすぎるブラックボランティアみたいな噂も聞いていた。通常ならば断わるところだけれど、当時ある出来事によって精神が健康でなかった僕は、ろくに考えもせずに行きますと答えたのだった。そして、そのままズルズルと引き込まれていった。ぼんぼんぼん。(したたる涙が膝で爆ぜる音)

とはいえ、労福会での活動は意外にも楽しいものだった。会議にゆけば不毛な大激論が交わされていたり、路上のおじさんから人生訓をたまわったり、知らない人に罵られたり。あまりに楽しいので、旅行に出たときと酷い風邪をこじらせたとき以外に夜回りを休んだことはないほどなのだ。

来年度も面白いといいなあ。

小川遼

「行けるところまで行ってお金が尽きたら、そこで死のうと思いました」——。昨日、三日間ろくに食べていないという人から電話があり、小川君と大通地下まで話を聞きに行った。「でも情けないことに死ぬ勇気もなく。土曜日に地下で寝ていて、起きたらこの紙があったから電話してみたんです」と彼は役所で労福のビラを担当者に見せた。所持金は1円。その日は拾った100円を使い、マクドナルドで夜を明かしていた。そんな話を聴いて担当者は一言、「死んだらどれだけ多くの人に迷惑を掛けるか考えてください」。こくこくと彼は頷いて、「わかります。頭ではわかってるんです」を繰り返した。

死んだら他人に迷惑を掛ける、という考えが数多くの人々の自殺を思いとどまらせていることはたしかかもしれない。しかしその一方で、彼らを自殺の瀬戸際まで追いやっている一要因が、この他人に迷惑を掛けずに生き続けなければならないという内面化された規範であることもまた動かしようのない事実である。

「病院には行かないよ、早く死にたいもの」「私は苦しい思いをして当然の人間ですから」「あとは死ぬのを待つだけだね」そんな言葉を数限りなく聞いた。それは労福の活動の中だけでなく、私の家族の口から電話越しに聞こえてくることも度々あって、昨年度はそういった言葉にずるずると引きずられ、一日中気持ちが沈む日も少なくなかった。一方今年、体調が抜群に悪かった（自律神経失調！真っ黒な血尿！）にも関わらず、このだるい体をもって淡白な気持ちで過ごすことができた。でもそれは労福の活動を事務的にこなすようになったとか、家族関係がどこかふっきれたとか、恐らくそういうわけではない。むしろ、彼らの言葉やその後ろにあるものを自分の身体に見出し始めたせいで、それに対してどこか反発していなければやっていかれないような、そういう意味ではただ沈んでいた昨年度よりも逼迫した毎日だったと言えるのかもしれない。

この一年間、路上で多くの人と出会い、ぼつぼつと身の上話を聴いた。前述の規範以外にも路上へ出るに至ったきっかけの共通項として、“ちゃんと働けない”という点が多く見られた。例えばそれは、正社員として“ちゃんと”安定した収入を得ながら働きたいが、非正規雇用で派遣切りに遭い、寮を追われ路上へ、という場合もあれば、仕事が辛かったので“ちゃんと”通勤せずに逃げ出してそのまま路上へ、という場合もある。とにかく、一般的に“ちゃんとした働き方”とされている働き方ができない人が多い。

実感として北大生の多くは、無意識のうちにそうした“ちゃんと働けない”と自分とは生涯無縁であると決め込んでいるように思う。いや、実際に無縁のまま一生を終える人がほとんどなのかもしれない。しかし、その場合の「無縁」は、直接的な関わりを感じる機会を持たない、という意味での「無縁」に過ぎない。実際には（詳述は避ける！）、卒業後まで待たなくとも学生の時分でさえ、アルバイトや就職活動などといった場面に、様々な労働問題を含んだ社会情勢が律儀なまでに反映されており、“ちゃんと”って何か、を考える材料に溢れている。

折しも自身のアルバイト先でもトラブルを抱えていたことと、ホームレス支援までいなくても実はすぐそこにあった材料をもっと見たいしもっと見てほしいという思いから、私は今年1月に労福の友人たちを巻き込んで学生の労働組合を結成した。あとから読んだ本の中で、若者がこうした労働運動に取り組む背景として野宿者支援の経験が少なくないことを知り、ひとり苦笑いをした。

「下郷さんの好きにやったらええんよ。お金いっぱいあるんやし」というのは、昨年度、私に来期事務局長を勧めてきた高田君の言葉である。結果的にこれは嘘になった。たしかに彼のいた年はわりと金を湯水のように使っていたのだが、いざ蓋を開けてみると労福は驚くほどの財政難だったのだ。シャワー事業は夢のまた夢になったし、天使大学との炊き出しも場所代が負担となり1回しか実施できなかった。こっそり考えていた、労福が旅費を一部負担し、学生が全国各地のホームレス支援等の現場で勉強する機会を作るとかいう策略も、結局言い出すことさえしないままに終わった。他にもあらゆる場面で金が無いと

いう部分でつまずいたり、諦めたりすることがあって、その時の私の気持ちを的確に表現すると、めちゃくちゃイライラした。そして仕方がないので、金が無くてもできること、をやることにした。それは何かと言えば、主に“ちゃんとすること”だった。ちゃんと話し合うこと、ちゃんと記録を整理すること、ちゃんとフォローアップすること、などなど。個人的にやってみたかったことは大方さらっと忘れて、せめていつか労福に余裕ができて誰かが何かを始めたいと思ったときにスムーズに動きだせるような下地を作っておけたらいいなと思った。今の労福はぐちゃぐちゃで（最初は誰が会員なのかもわからなかったし、労福に関わった当事者のリストも穴だらけで、特に2010年度より前の資料はどうなっているのか今もよくわからない。以前の会員の方でこれを読んでいてかつ当時の何かしらの資料を持っていたら連絡をください）、ぐちゃぐちゃの上に何か新しく始めても結局ぐちゃぐちゃになってしまうだろうから。こうして私は色んな場面で「労福のここがダメだからちゃんとしよう」と提案を始めるのだけど、その度にしばしば「そのダメさが労福のいいところ」などという発言が待ち構えており、それが私の気持ちをいちいち萎えさせた。そうでなくとも“ちゃんとすること”というのは、強要される側は然り、する側にも大変ストレスのかかることなのに、ましてや「ダメさが労福らしさのに」なんて言われてしまうと、こちらがその「労福らしさ」とやらをぶっ壊してきた鬼か何かのようで、精神的負担は倍増する。たとえば、夜回りのやり方が議題に上がったときに、毎週メンバーが変わるので引き継ぎのために出発前に先週のおさらいをしよう、ということに決まった。でも、今私が「先週のおさらい～」と言わないでいると、やらずに出発することが多い。それどころか私が言うと、え、面倒くさい、という顔をされることもある。私一人で決めたことではないのに、今やただの鬼の我儘となってしまった。

と、ここまで若干刺々しく書き連ねてきたが、それにそもそも「基本的に事務局長のすきにやる」という会の暗黙の方針そのものに不満がないわけでもないのだが、そういった方針の前提がある以上、私の力量不足であったこともまた間違いない。というか、元々“ちゃんとする”のが一番苦手なのは私なのだ。むしろ私の“ちゃんとしてなさ”にイライラしていた人たちもいるだろうし、そこをせっせとフォローしてくれていた人たちもいれば、全然別のところでずっと頑張っていた人もいた。この場を借りてお詫びとお礼を言いたい。特に小川君に。すみません。ありがとうございます。

と言っても、今年度の全てが鬼の巻き起こした茶番であったかというところでもない。たとえば、夜回りピラの裏面を毎週書き換えるだとか、毎週会議をするだとか、小さいことだけれど、今では当たり前のようになされている。その変化の一つ一つは意義深いものと言えないにしても、変化が当然のように起こりうるという日常そのものによって、ちょっと前に労福の中に漂っていたような、労福は何ひとつ変えられない、元々あるものをこなすだけ、といった閉塞感が少し晴れ始めたのではないかと思う。

私が来年度からどう労福に関わっていくかはまだ考え中なのだが、少なくとも「鬼」部

分でやりかけたことは、ある程度カタをつけるところまでやりたいと考えている。そしてもう一つ、真剣に向き合っただけでカタをつけたいことがある。それはしつこく強調して書いてきたが、“ちゃんと”の問題である。当事者の“ちゃんとできない”を包摂することと、自分や同じ支援者の“ちゃんとできない”を見逃すことは同じなのか。違うというならばなぜ違うのか。思えば、いつもいつもこの壁にぶつかってきた。ここまで書いて、さっきちょうど小川君に「下郷は仕事を人に振るのが下手」という指摘を受けたのだが、本当にそうだと思う。というのは、以前はもう少しマシだったはずなのだが、この“ちゃんと”問題にぶつかってからは人に何か頼むことさえ二の足を踏んでしまうのだ。“ちゃんと”を考え始めたせいで、ますます“ちゃんと”できなくなってしまった。泥沼である。

下郷沙季

今年度から活動に参加している上田です。ピッカピッカの一年生でした。

何でも好きなことを書いて良いと言われたので、労福会との出会いと、来年の労福会についてだらだらと書きます。

4月、期待に胸を膨らませて労福会の説明会に参加すると、連れていかれたのは何とも怪しげな店。途中から正体不明のおじさんたちが会話に入ってくるし、純粋培養の私には、刺激が強い経験でした。この刺激がクセになったのか、夜回りに参加するようになりました。労福会に参加している方々は、皆一癖も二癖もある人たちで、一緒にいることがとても楽しかったので、労福会の活動にも積極的に参加するようになり、今に至ります。田舎から大都会札幌に出てきて、右も左もわからない私を、左へ左へ(思想的に)導いてくれた労福会の皆さんには、感謝の言葉が尽きません。

そんな私ですが、活躍(というより従順さ)が評価されたのか、来年度から事務局次長という大役を仰せつかることになりました。労福会に参加してたった1年のペーパーが生意気言いやがって、と思う方もいらっしゃると思いますが、来年度の労福会について語りたいたいと思います。

労福会に未来について、様々な意見があります。現在の路線を維持する。活動を縮小する。調査活動に特化するなどです。私個人としては、調査活動に力を入れつつも、現在の活動はできるだけ維持していきたいと考えています。

現在の活動は、一部の人に負担がかかりすぎているという問題があります。ですが、過剰な負担の問題は、仕事を分散させることである程度解消できると思います。何回か夜回りなどの活動に来た人には、ある程度の仕事を任せるようにすれば、会員の負担が減ると共に、その人にも労福会への帰属意識が芽生え、もっと積極的に活動に参加してもらえ

よくなると思います。なので、活動を縮小するということには、賛同しかねます。もちろん、現在の活動を無批判に継続するというわけではありません。減らせるところは減らしていきますが、少なくとも夜回りや人数調査などの基幹事業は継続していきたいです。

そして、現在の活動の多くは調査活動に結びつくものでもあるので、とりわけ調査活動に特化した団体に変化する必要があるとも思えません。

調査活動については、ネットカフェなどの調査がしたいと思っています。また、現在行っている人数調査についても、コースや調査時間の変更なども含めて、精度を上げるための改良をしていきたいです。

労福会の皆さんにおんぶに抱っここの現状ですが、来年度はもたれかかるぐらいになりたいと思っています。

精進いたしますので、来年度もよろしくお願いします。

上田文和

労福会に入会してちょうど一年が経った。

ふりかえると「北海道の労働と福祉を考える会」が札幌のホームレス支援団体の名称とホームページを通し知ったものの、あまりにも漠然とした考えのままの入会であった。

お世辞にも積極的な活動をしている訳でも無く、この半年は夜回りにすら顔を出していない。

自身が想定外の病で退職をし、道北の田舎町に戻るも無能故仕事にもありつけず、またのこのこと一昨年この都会にやって来た。そして卒業した大学の聴講生という肩書きを得、約20年前学生時代に住んでいたアパートの大家さんを半分だまし、無事に屋根のある現在の住居を得た。

雨風をしのげる生活はできることとなったものの、私が現役の学生時代から少々のブランクを経て何とか仕事と生活ができていた時代の札幌の景色とはまるで違う。はっきり言って浦島太郎さん状態である。

そうこうしているうちに雪に埋もれる事も無くこの部屋で二回目、隣の部屋も合わせると六回目の春を迎える事が出来そうだ。どうやら労福会にも居候させていただけた様です。

さて、路上の「当事者」と呼ばれる人たちも事情はともあれ恐らく何らかの喪失体験を重ね、浦島太郎さんにならざるを得なかったのでは？と現在思っている。

私も別の場に行けば「当事者」と呼ばれる立場であるし、労福会に顔を出せば「支援者」

つまり、野宿者が、支援につながって、路上から脱出しても、その後の生活がどうなったのかということが、見えにくいのである。野宿者が脱路上した後の生活や居宅生活に移った後の生活が、どのようなものか、その全容について把握できる仕組みづくりが、労福会にとって重要な課題となっている。しかし、労福会は、学生主体のボランティア団体で、プロの支援団体というわけではないので、会として、人手不足という問題もあり、学生が学業をしながら、運営していく中、「どこまでやれるのか」「やれる範囲で」と言うのだが、なかなかそのあたりは難しい。これは、労福会としての今後の方向性という話にも関わってくる。そうした労福会の向かうべき方向性という話も、来年度は会員同士で議論を深めていきたい。

ホームレス支援というのは、その人の人生の一端に関わるということでもある。生活保護の同伴支援をしても、「野宿」に至った人たちの中には、「自分がこんな目に遭うとは思わなかった」と語る人もいる。まさに、歩んできた人生の中で絶望の淵に立たされた時であったことが窺える。そうした中で、脱路上の支援に関わって、当事者の方から泣きながら感謝されることもある。その時はやはり、嬉しいし、活動の「やりがい」のようなものを感じる。しかし、支援を通して、そのように嬉しく思う出来事というのはそれ程に多くはない。中には、約束の時間に来なかったり、「裏切り」のようなことを味わうこともある。「ホームレス」の人の中には色々な背景をもっている人や、一言では表せないようなさまざまな問題や困難を持っている人がいる。そうした中で、支援者も幾多の困難に直面している。しかし、それでも、「ホームレス」支援をやっている以上はそういう人と根気強く関わっていかなければならない。そこで、ある種のジレンマに陥るのだが、これは、福祉現場に通底している支援者が直面する難しさなのだろう。

今でこそ日本では、「ホームレス」が存在していることが当たり前のこと、当然のこのように認識されているが、僕はやはり、「ホームレス」を生み出してしまう世の中というのは、「どこかおかしい」「どこか、何かが間違ってるんじゃないか」と思うわけである。その「何か」というのは、自分中ではいまだ確定しかねるが、これからも考え続けたいといけな。これは、その得体の知れない「何か」との闘いである、とさえ思えてくる。

「自分は一体、何と闘っているのだろう」と時折、考えたりもするのだが、答えは一向に見えないままである。ただ、ひとつ分かるのは、路上生活をしている人たちを放置しておくことは、容認できない、ということである。「ホームレス」の支援や研究をしている以上は、ホームレス問題が少しでも緩和・解消されていくような方向へ導かなくてはならない。一般的には社会経済の問題とされがちだが、それだけではなく、その周辺やその手前に、又は人の目には届きにくい、見えにくいところに、様々な問題をはらんでいるのだろう。そうしたなかで、「ホームレス」という社会の最底辺に追いやられている人たちがいるということである。そこで、何が問題であり、何をどのように変える必要があるのかを見定めなくてはならない。問題は山積し、道のりはただ険しい。それでも、労福会の会員には、考え方は色々でも、継続的に活動している人たちは、ホームレス問題に関して（また

を装ったりもしている。

しかし、「当事者」と「支援者」とか、「年齢」や「立場」といった相対する関係性が少ないところが労福会らしいのだろうと何となく感じている。

そこに関わる人たち、これから関わるであろう人たちの居場所。次の居場所に辿り着くための通過点。そしてまた戻ってこられるところ。そこが労福会なのだろうなあ。と私は思っている。

兼丸章一

「活動の原点」

労福会の活動を始めて、1年半くらいが過ぎた。まだまだ新米である。これまでの活動を振り返ってみると、自分にとっての活動の原動力は、初めての夜回りで出会った「野宿」の状態にある人との出会いに尽きる、と思っている。そこで、今まで味わったことのないある種の衝撃を受けたのを覚えている。世の中に対する憤りとでも言ったものだろうか。その人は、どこからどう見ても「困っている」「支援が必要な」人であった。「この状態を、行政や市民は放っておくの？何のための福祉か？」とか「これを放っておいて許されるの？おかしいでしょ？」とか「これは容認されるべき状態ではないでしょ」とか。自分の頭の中で色々よぎった、あの感覚を今でも覚えているし、あれはきっとこれからも「忘れてはいけない事」だと自分では思っている。そして、あの時に生じた感情・感覚・思いが、自分が大学院でホームレス問題を研究する原点にもなっている。まさに「出会ってしまった」と言わざるを得ない。それから、僕は、ホームレス問題について考えはじめ、あれが自分にとって、労福会の活動の原動力になっているようにも思う。

その時に出会った「野宿」の人というのは、大通り公園のベンチで休んでいた50代の痩せ細った身体をした男性であった。その人は、他県から、残った有り金をはたいて、札幌には仕事があると聞きつけて、こっちまでフェリーで来たと言う。食事もここ数日まともにとれていなかった。家族やきょうだい、行政に相談をしても、不可解な対応を取られてしまい、路上生活のなかで孤立していた。家族や行政にも見捨てられた結果の果てである。あの時の痛ましい光景は、自分の身体に緊緊と伝わり、「あの人に何が起こっているのか」

「何故、こんな状況になったのか」「どうしたらいいのか」と思い悩んだものである。それから、その人は、とある支援団体に保護されたが、その後の消息はわからない。生活保護を受けてアパート生活に移ったのか、再路上して、まだ路上のどこかにいるのか、札幌から他県に移ったのかなどは、全く分からない。これは労福会としても一つの重要な課題であると言える。

は労福会に関して)、何らかの問題意識を持ちながら、会に参加している。この問題について、活動しながら議論し合える仲間がいるというのは、一つの希望でもある。同時に、会員がもっと増えればなお良いのだが、それも当会の今後の課題である。これからも会員間で、議論を深め、しぶとく考え続けていきたい。

「初心」を大事にしつつ、地道に、気長に、この問題に関わっていききたいと思う。

では、会員のみなさん、来年度もよろしくお願ひします。

山口大輔

先日、私の職場で来年度入学予定の高校生を対象にした「入学前研修」という企画が開催された。それは在学生在が入学前（春休み）の過ごし方や入学後の生活の様子などを伝えて入学予定者の様々な不安を除去することを目的としたものだ。この企画は数年前から実施されているが、当初は有志の学生が何を伝えるか、どのようにして伝えるかなどを立案し実施していた。学生企画ということでたどたどしさはあったものの、どうやったら不安なく入学してもらえるかを一生懸命考えてくれたことが伝わるアットホームな企画であった。ところが今回、ある教員が事前に内容の点検をして、もっとこうしなさい、その時の立ち位置はここにしなさい、といった細かい指導が入ることになった（おそらくその教員は誰かに頼まれたわけではなく、善意だったと思われる）。その結果、なるほど企画中の学生の動きは統制されたキビキビしたものにはなったが、粗相のないようにという緊張感満載の雰囲気、学生たちの表情は硬く、おそらくあらかじめ用意されていたのであろうセリフを囁いた学生が蚊の鳴くような声で「申し訳ございません」と参加している高校生に謝ってしまうなど、およそ入学予定者の不安を除去する目的とは程遠い（むしろ不安を増長させる）結果となった。なぜか僕はその光景を見て何となく数年前の労福会のことを思い出していたのであった。

ところで私は今年度の途中からこっそりと労福会の代表になってしまいました。とはいっても何か新しく仕事をしたというわけでもなく、相変わらずいい加減でチャンポランなおじさんとして過ごしておりました。新しくなった代表に期待をしていたという人はいないと思いますが、がっかりさせていたらごめんなさい。もし来年度も代表をやることになるなら、来年度は労福会の活動についてちょっと考えていることを出していこうかなと思っています。

山内太郎

もう少しで私が夜回りに参加して一年になります。最近では、「おう久しぶり」「この前はどうも」と話しかけてきてくれる路上生活者も増え、やっとなら関係性が築けてきたと感

じています。私が路上生活者に興味を抱いたのは、一昨年の冬に生気の無い、今にも倒れそうな路上生活者を見かけたことがきっかけでした。それまで、路上生活者の住めない北の田舎で生活してきた私にとってその光景はとても衝撃的でした。「大丈夫ですか？」と声をかけたいけれど、声をかけても支援の知識が少ない私には何も手を貸すことができない。お金を渡すことも、食べ物を買って与えることも何か違うと感じました。私は「心配だ」と野宿者を見つめながら、声をかけること無く「素通り」しました。その衝撃な出来事から数か月後、私は労福会にたどり着きました。

最初は「路上生活者とお話してみたい」という気持ちで夜回りに参加しましたが、今では「路上生活者の支援を考えたい」という気持ちに変化しました。

夜回りをしていて、路上生活者には、なんらかの障害を持っていると思われる方、仕事をしていて失敗して職を失った方、生活保護を受けて路上生活から脱しても直ぐに路上に戻って来てしまう方が多いということに気が付きました。私は、路上生活とは、障害者・高齢者・母子等、適切な支援を受けることができなかつた福祉の対象となる方々が最後にたどり着いてしまう場所なのではないか、社会から見放された対象者が集められた、「社会の底」なのではないかと思ってしまうようになりました。どうして路上から抜け出せないのか、私は夜回りに参加して路上生活者から情報を集めようと思いました。路上生活になって間もない方は、社会復帰への思いが強く、生活保護申請や施設への入所など積極的に自立を目指す方が多くいました。しかし、路上生活が長期に渡る方の多くは、「自分を捨てた社会が悪いのではなく自分が悪い」と自分を責め、支援を受けることは申し訳ないと支援の提供を断っていました。

支援を受ける気は無いが支援が必要だと思われるたくさんの方と出会って、PSWとして彼らの気持ちを尊重した支援を提供するにはどうすれば良いのか悩みました。明確な答えが出ず、ずっと悩みながら活動に参加しています。

今では路上支援にどっぷりとハマり、卒業しても路上支援を続けたいと思っています。

活動に参加することで、PSWとしてできる路上支援とは何か、考えさせて頂きたいと思っています。今後よろしく願いいたします。

柏谷美沙

「なんでホームレス支援なんかしようと思ったん」と、いつか高田君が訊きました。その当人に誘われて参加したに過ぎない私は、回答に窮しました。しかし何だかんだ言って1年近く参加しているからには、何らかの継続する要因があるには違いありません。

ふわっとした言葉を掴まえて言うなら、路上で会うひとびとがみんな誰かに似ているか

らなのかなあ、と思い当たりました。かつてじぶんが傷つけたひと、傷つけられたひと、何より目を逸らしたくて仕方ない自分自身を見ているようで、とても虫の居所が悪いのです。

ひとは誰かを援けることを通して、自分自身を救済したいのではないか。乗り越えられなかった過去と、再び対峙するのではないか。少なくとも私に関していえば、ボランティアは利他的活動ではなく、徹底的に利己的な動機に基づいているといわざるを得ません。見知らぬひとを「同じ人間なのだから」という原理に基づいて支援する一方で、最も身近なひとびと、支えてくれる人々に対して、傷つけたり、感謝しなかったり、顧みなかったりなどがあれば、どうにも白々しい。そして実際に、そんなことばかりじゃないかと思うのです。

波田地 利子